

第22回 白梅保育セミナー

いま保育に問われていること

『「要領・指針」の改訂(改定)の動向とこれからの保育』

2016年12月4日(日) 9:50～16:30

白梅保育セミナーは、毎年のメインテーマを「いま保育に問われていること」とし、その時々課題をサブテーマに掲げてきた。今年度も引き続き、学び続ける保育者にスポットをあて、全体講演と分科会3つのプログラムを企画した。募集定員の150名をはるかに超えて300名以上の申込みをいただき、スクリーン会場を含むJ棟の2会場での開催となった。教育・福祉研究センター運営委員の林を責任者として、師岡(子ども学科)、佐久間(発達臨床学科)、源(保育科)の各教員にセミナー運営委員として協力いただき、午前の全体講演では無藤氏、汐見氏に改訂(改定)のポイントについて解説いただいた。

午後の分科会では、幼稚園、保育所、認定こども園の3つに分かれ、要領・指針の改訂(改定)を踏まえた今後の保育のあり方について、各保育現場をリードされている先生方から話題提供をしていただき、参加者の方々とともに議論を深めた。幼稚園は増田昭一先生(調布多摩川幼稚園園長)、保育所は島本一男先生(諏訪保育園園長)、認定子ども園は中山昌樹先生(認定こども園あかみ幼稚園園長)から話題提供をいただいた。詳細については以下に示す通りである。

1日を通したプログラムであったが、参加者ともに充実したセミナーとなった。

(林 薫)

【全体プログラム】

1. 全体講演

テーマ:「要領・指針」の改訂(改定)の動向とこれからの保育

シンポジスト: 汐見稔幸、無藤 隆

司会: 師岡 章

2. 分科会

I. 幼稚園 分科会

コメンテーター: 師岡 章

司会: 林 薫

[話題提供]

増田昭一先生(調布多摩川幼稚園園長)

II. 保育所 分科会

コメンテーター: 近藤幹生

司会: 源 証香

[話題提供]

島本一男先生(諏訪保育園園長)

III. 認定こども園分科会

コメンテーター: 無藤 隆

司会: 佐久間路子

[話題提供]

中山昌樹先生

(認定こども園あかみ幼稚園園長)

【各プログラム概要】

1. 全体講演 「要領・指針」改訂(改定)の動向とこれからの保育

シンポジスト: 汐見稔幸、無藤 隆

司会: 師岡 章

本シンポジウムでは、幼稚園教育要領および保育所保育指針の改訂(改定)の中心を担っておられる無藤氏、汐見氏の講演、そして参加者の質疑

応答という形式で行われた。

①幼稚園教育要領の改訂について 無藤 隆

(白梅学園大学大学院教授・子ども学研究科長)

今回の改訂で大事なことは、義務教育の下に、幼稚園・保育所・認定こども園を共通化して、子ども子育て新制度という同じ制度の枠組みの中で「幼児教育」として共通に捉えることであり、幼児教育が、幼児期にふさわしい教育のあり方を保持しながら、同時に小学校以降に接続しつながっていくという教育のあり方を作っていくことを明確にすることである。その中心的な考え方が「資質・能力」であり、知的な力と情意的な力の両面が相互に巡回し合いながら育っていくのである。その三つの柱は、幼児教育においては、ア「知識・技能の基礎（気付くこと、わかること、できること）」、イ「思考力・判断力・表現力等の基礎（考えること、工夫すること、試すこと）」、ウ「学びに向かう力・人間性等（心情、意欲、態度であり、やりたいことについて粘り強く取り組む、むずかしいことに挑戦していく、どうしたらよいか考えながら工夫してやり遂げようとするなどの学びに向かう力）」である。そして、幼児教育がどこに向かっていくのかという方向性を明確にしたものが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、10の姿が明示されている。これらは新しいものではなく、これまでの5領域に書かれているものを、年長の後半にねらいを達成するために教員が指導し幼児が身につけていくことが望まれるものを抽出・整理したものであり、この時期にいきなり出てくるものではなく、長い育ちのなかの結果として表れてくるものである。

さらに今回の改訂では3つの新しいことが加わっている。第一は出口の部分に、10の姿が入ったことであり、小学校では10の姿を発揮できるようにしながら、それを徐々に小学校の授業・教科のありかたに導く、スタートカリキュラムの実施が義務づけられた。第二は、入口部分であり、3歳の幼児教育を始める前の乳児保育と家庭保育における1,2歳の姿を、幼稚園も考えていくこと

になる。第三は、カリキュラム・マネジメントである。単に指導計画の立て方ではなく、そもそも幼児教育としてなにを目指すのか、その目標、ねらいを考え、実際にうまくいっているかどうかをチェックしながら、やり方を見直していくことであり、そのために様々な資源（物的、人的、園内だけでなく地域全体）を使うことを含んでいる。そして自分たちの園をどう運営していくのかを、全ての職員がそれぞれの立場で、園全体の問題として考えていくこと示している。これらによって、教育する場としての形が完成してきたことを意味する。これを幼稚園・保育所・認定こども園で共通化しながら、幼児教育としてしっかりとしたものにしていこうというのが、今回の改定の一番大きなポイントである。

②保育所保育指針改定について 汐見稔幸

(白梅学園大学 学長)

今回の改定の課題には、(2) 保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけがあるが、これは先ほど無藤氏が話されたことであり、幼稚園も保育所も原則は全く同じに共有していこうということである。

もう一つ大事なこととして、(1) 乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実」がある。前回の改定の際に指針は初めて告示化され、内容が大綱化されたため、旧保育指針にあった各年齢の子どもの育ちは解説に記述されることとなったが、今回の改定では、いまの現場のニーズに合わせて、しっかりと記述する方向となった。またこの10年間に保育所に入る子どもの数や保育所の数も増え、0,1,2歳児の4割近くが保育所を利用するようになっており、0,1,2歳児の保育が社会的に大きな役割を果たすようになってきている。それを導くような指針を充実させようということである。

0,1,2歳児の保育の重要性として、一つにはこの時期が「子どもの心身の発達にとってきわめて重要な時期であり、その後の成長や社会性の獲得等にも大きな影響を与えるもの」ということが

わかってきたことである。二つ目には、非認知的能力（例えば自己制御、自己肯定感、自己有能感、情動コントロールなどの社会情動的スキル）がしっかり育っている子どもは、社会にでて挫折を少なくできるし、何かあってもきちんと自分を大事にして生きて行ける力になっていることがわかってきたので、それらの基礎を育てることがこれからの教育では非常に大事ということである。これまで日本の保育で心情、意欲、態度を大事にしてきたことは、ここで述べた社会情動的スキルとかなり重なる。日本にとってはとりわけ新しいことではなく、世界中がそのことが大事だったということを共通で認め始めた。そういう時代にふさわしく、しっかり育てて行くことをもう一回自覚していかなくはいけないのである。そして「愛着関係（アタッチメント）」や「基本的信頼感」を形成していくことも、重要なキーワードであり、保育者が暖かく応答的に関わることを含めて、この時期の保育の原理を示している。その後には学びの芽生えという節があり、乳児期は生涯の学びの出発点と捉えられている。

さらに養護と教育は一体的に行うのではあるが、養護の部分がとりわけ重要である。暖かさ、愛されているという雰囲気の中で保育をすることが大切であり、保護し教育するから保育といえるのである。具体的な章構成において、第1章総則の2に「養護の理念」を持ってきており、それだけ養護が大切ということである。また総則の3「保育の計画及び評価」は、今回は幼児教育として同じ方向を目指そうということから、幼稚園教育要領と同じように保育の計画を総則に持ってきたのである。

③補足と質疑

無藤氏より、養護と教育の一体性の幼稚園教育における意味について解説があり、さらに指針の改定で、保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけという強い表現に関して、3歳前後から上については、実質的に幼稚園と同じだという宣言をしていると感じられるとの発言があった。汐

見氏からは、乳児での少人数のグループ構成による保育についての解説と、幼児教育の三つの柱や10の姿、小学校との接続など、保育所においても幼稚園と同じ内容で教育していくことを強調していること、保育の計画や評価の在り方について説明された。

質疑の時間では、参加者から乳児での少人数のグループ構成の人数の想定、保育士のキャリアパスの明確化、ミドルリーダーや管理職研修の義務化にむけた動き、保育指針の小規模保育への対応、幼保の違いに対する小学校側の受けとめ、保育所において保育を準備する時間のなさの実態についての質問があり、講師による解説がなされた。

2. 分科会

分科会（Ⅰ）：幼稚園

話題提供者：増田昭一先生

（調布多摩川幼稚園園長）

コメンテーター：師岡 章（白梅学園大学）

本分科会では、全体講演の要領・指針の改定の内容を踏まえて、今後の保育のあり方について議論を深めるプログラムとした。まず、増田氏から、子どもを主体とした保育実践について報告いただき、後半では、小グループでのグループワークを行い、参加者の方々とともに、現場での現状と課題について共有する中で議論を深めた。増田氏からは、いくつかの実践事例を紹介いただき、その中で保育者が計画に縛られるのではなく、子どもの心の動きに応じて、臨機応変に対応し、子どもの経験を保障していく環境が保育の質を高めていくことにつながっていくことが説明された。グループワークにおいては、それぞれ園での実態と課題について話し合い、意見交換を行った。師岡教授からは、幼稚園教育要領が示す保育の基本を踏まえた上で、より質の高い保育実践を支える柔軟かつ多様な保育のあり方が示唆された。子ども理解の多面性を深める機会となり、それぞれに有意義な時間となった。

分科会（Ⅱ）：保育所

話題提供者：島本一男先生（諏訪保育園園長）

コメンテーター：近藤幹生（白梅学園大学）

本分科会では、セミナー前半のシンポジウムでの議論を受け、さらに「保育所保育指針」の改定に関する動向とこれからの保育について、考えを深めていく場にしたと考えた。特に、保育現場での現状をしっかりと見つめながら、どのような課題があるかの議論を進めた。分科会の前半は、島本氏からの話題提供と近藤教授からのコメント、後半は小グループでの意見交換というプログラムで実施した。島本氏からは、保育園園長としての立場から、保育所保育指針改定（中間まとめ）について、細部まで丁寧に考察した話題提供いただいた。改定の文言に関する紹介だけでなく、具体的な保育実践を基にどこに課題があるのかを整理、提案いただいたことで、日々の保育に直結することとして、今回の改定を捉えることができた。例えば、幼稚園教育要領との相違、福祉と教育の融合、教育と養護、地域との関係、子どもの生活時間などの視点が挙げられました。それぞれの保育者が、保育を裏付けるものとして保育所保育指針をきちんと読み込むことから始めることの必要性が提起された。島本氏の話題提供に対し、保育学の近藤教授からは、これまで積み重ねてきた保育現場の実践を大事にすることが重要であると示唆された。

分科会（Ⅲ）：認定こども園

話題提供者：中山昌樹

（認定こども園あかみ幼稚園園長）

コメンテーター：無藤 隆（白梅学園大学）

本分科会では、まず無藤氏が「幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂に関する審議のまとめ」を踏まえ解説し、次に話題提供者の中山先生より園の実践報告を行った。後半は、参加者が小グループに分かれて話し合いを行い、それを踏まえて質疑を1時間を行った。無藤氏の解説では、認定子ども園の特徴である在園時間が異なる園児に対する「教育及び保育」について、5領域を踏

まえることの重要性、一日の生活の流れの中で集中して遊ぶ時間とゆったりして過ごす時間の配慮、登園する園児と登園しない園児がいる期間中の配慮、子育て支援にあたっての配慮などについて説明された。

中山氏からは「要領・指針」改定の動向とこれからの保育～これからの認定こども園にできること～というタイトルで、「共通利用時間」における質の高い幼児期の教育・保育のあり方、地元の小学校と連携したアプローチ・スタートカリキュラムの開発、育ちの一体性を考慮した多様な保育時間への対応（午後の保育は異年齢クラス編成で、午後のクラスの担任（共通利用時間のサブ保育者）を配置）、親・保護者たちがお客様にならずに保育をめぐって様々な協働をする子育て支援の取り組みなどの先進的な実践が報告された。

小グループの話し合いを踏まえた質疑では、現職の認定こども園の教諭やこれから認定こども園に転換する予定の方々から、実践を高めていくためにできることについて質問（例、保護者の保育への参加、記録の生かし方、職員の働き方など）があり、講師らの豊富な実践経験をもとに具体的な回答がなされ、非常に有意義な時間となった。

（文責：佐久間路子、源 証香、林 薫）